

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 心理学 ）	氏名	徳岡 大
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
<p style="text-align: center;">他者の存在による達成行動の促進          — 「他者のため」という意識に支えられた動機づけの影響 —</p>			
論文審査担当者			
主 査	教 授	杉村 和美	
審査委員	教 授	中條 和光	
審査委員	教 授	湯澤 正通	
審査委員	教 授	森田 愛子	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、達成行動に及ぼす他者の肯定的な影響を検討したものである。他者から良い評価を得たり他者と同調するためではなく、ある行動を遂行することが結果として他者のためになると意識した場合に、その行動が増大することを「他者のため」効果と定義し、大学生を対象とした5つの研究を行なった。その結果、他者のためになるという情報を提示するだけで達成行動の増大が確認され、達成行動の動機づけに及ぼす他者の肯定的側面が実証された。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章「本研究の背景と目的」は6節からなる。第1節「達成行動および達成動機の定義と達成動機研究の概観」では、目標達成に動機づけられた行動を総称して達成行動と定義し、達成行動を動機づける様々な要因を整理した。第2節「達成行動研究における他者」では、従来の研究では他者という要因が動機づけに否定的な影響を及ぼすことが示されてきたことを指摘した。第3節「動機づけに及ぼす他者の影響：自己決定理論による解釈」では、達成動機づけに及ぼす他者の影響が否定的であった理由を、自己決定理論における行動調整の自律性の観点から説明した。先行研究では、動機づけの要因としての他者が、自律性の低い事態で検討されてきたと指摘し、自律的な事態において、他者の肯定的な影響を実証することの重要性を論じた。第4節「他者志向的動機の研究」では、他者の肯定的な影響を扱い得る研究として、他者の期待に応えることに着目した他者志向的動機研究を概観した。第5節「達成行動における『他者のため』という意識と自律性」では、他者志向的動機に基づく行動は低い自律性に支えられた動機である可能性を指摘し、他者志向的動機の否定的な側面を排除した、自律的に「他者のため」という意識を持つことが達成行動に及ぼす影響を検討する必要性を指摘した。以上を踏まえ第6節「本研究の目的」では、達成行動における純粋な「他者のため」効果の存在を実証することを本研究の目的とした。</p> <p>第2章「アルバイト場面を用いた『他者のため』という意識の検討（研究1）」は3節からなる。第1節「アルバイト場面を用いた実験室実験（研究1-1）」および第2節「アルバイト場面を用いた実験室実験2（研究1-2）」では、アルバイト場面を実験室に再現し、自分のアルバイトでの行動が他者のためになる場面とそうならない場面を比較し、「他者のた</p>			

め」効果が見られるかを検討した。その結果、他者のためになる場面の方が、アルバイトを超過した時間に行う作業量が増大し、「他者のため」効果が実証された。第3節「アルバイト場面を用いた質問紙実験（研究1-3）」では、アルバイト場面を想定させる質問紙実験によって、「他者のため」効果が、自分の作業が友人に伝わると期待することによって生じていないかを検証した。その結果、他者からの期待だけでなく、自分の作業が他者のためになること自体も達成行動を増大させることが示唆された。

第3章「学習場面を用いた『他者のため』という意識の検討（研究2）」では、目標達成に動機づけられた行動という広義の達成行動だけでなく、有能さの追求に関わり、達成が社会的な価値につながるという狭義の達成行動においても、「他者のため」効果が得られるか検討した。そのような達成行動として学習行動を取り上げ、場面想定法を用いて検討した結果、他者のためになる場面の方がそうならない場面より達成行動を増大させることが示され、学習場面においても「他者のため」効果が実証された。

第4章「フィールド実験を用いた『他者のため』という意識の検討（研究3）」では、実際の授業場面において「他者のため」効果が得られるか検討した。実習経験の反省点と改善点をまとめるレポート課題において、自分のために書く場合と、他者のために書く場合を比較した結果、一部のレポート内容の質が他者のために書く場合に高くなることが示され、現実の授業場面においても「他者のため」効果が再現された。

第5章「総合考察」は3節からなる。第1節「本研究の成果」では、他者のためになるという情報を提示することにより達成行動の増大が示され、達成行動の動機づけに及ぼす他者の肯定的側面を実証した点を述べた。第2節「本研究の意義」では、自律的な「他者のため」効果を実証した点、援助行動ではなく個人の達成行動を対象として「他者のため」効果を示した点、および、個人の主観ではなく行動を指標として動機づけの増大を示した点を意義として考察した。第3節「本研究の限界と今後の課題」では、本研究の限界を踏まえ、今後は「他者のため」効果の個人差や「他者のため」効果の得られやすい達成行動の特性を検討すること、また、参加者と実験環境のさらなる統制の必要性を論じた。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 個人の達成行動に対して、従来、自律性が低い事態で検討され、否定的影響があるとされてきた他者という要因について、自律的な事態において肯定的影響を及ぼし得る要因であることを提起し、それを「他者のため」効果として実証した点。
2. 他者からの期待や評価に対する懸念ではない、純粋な「他者のため」効果を検討し得る実験計画を立案し、実験室実験、質問紙実験、フィールド実験という多様な方法によってこれを検証した点。
3. 「他者のため」効果を自己決定理論の観点から解釈することで、従来不明確であった動機づけにおける他者という要因の理論的な位置づけを明確化した点。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。